

「紅包　　く赤い祝儀袋く」

（台湾の民間信仰にインスパイアされた話）

立原透耶

『婚約者』

夕暮れ時に散歩していると、不意に道端に赤い小さな封筒が落ちてるのが目に入った。拾おうと片手を伸ばしたところ、その手をひんやりした小さな手がそっと抑えた。顔を上げると、幼い女の子が立っている。道端の封筒を指差して黙って首を横に振る。あまりにも泣きそうな顔をしていたので、けっきょく封筒には手をつけず、その場を後にした。

翌日、友人から教わった。結婚せずに若くして死んだ人がいた場合、遺族が赤い封筒にあの世のお金である紙銭を入れて、道端に置いておくのだそうだ。それを拾った人は、その亡くなった人と結婚しなければならぬらしい。

冥婚というやつだ。

なるほど、拾うのを必死になって止めたはずだ、とぼくは目の端でちらちら動いている、いつもの小さな女の子を見やった。

ぼくが子供の頃に結婚を約束したあの子。湖に落ちて見つからなかったはずのあの子。いつの間にかずっとぼくのそばにいる。

ぼくにはとうに婚約者がいるのだ。

『口喧嘩』

授業に遅れそうになって慌てて走っていたら、思い切り何かを踏んづけた。

「ひどい！」

横から不意に目の覚めるような美少女が飛び出してきた。

「あたしの紅包を踏むなんて」

「そりゃ失敬。拾ってやろうか？」

「やめて！ 祟るわよ！」

美少女は必死になって舌を突き出したり、目を大きく見開いて見せたりした。どうやら、伝統的な幽霊のモノマネをしているらしい。それ、首吊り自殺した幽霊の特徴。君は綺麗に亡くなったみたいだけど。

「なんで拾われるのが嫌なんだい？」

「だって夢があるじゃない？」

「は？」

「好きな人と結婚したいもの」

「はいはい。死んでからそんなこと言ってもなあ」

「ひどい。あんたもてないでしょ。さてはオタクのSFマニア？」

当たっているけれど、謝れ。僕にじゃない。世界中のオタクでSFマニアの奴らに。

「君だつてちよつと顔がいいのを自慢して、好きな男から告白されるのを待っていたら、そいつは地味だけど性格のいい君の親友に告白して、悔し涙を流したりしてゐるんじゃないのかい」

しまった。凶星だつたらしい。美少女は真っ赤になつて大泣きし始めた。

「そうよ、その通りよ。どうせあたしは美人だけど性格悪いわよ。だから死んでも誰もお葬式に来てくれなかった。親友だと思つてたあの子だつて来てくれなかった……どうせ生きてても死んでも結婚なんてできないわよ」

かわいそうになつて来た。

僕だつて非モテ歴イコール人生歴だ。

ここはひとつ。

「仕方ないな。妥協してやるよ」

紅包を拾い上げた。

で。

今も毎日のように口喧嘩している。なんだか人生が楽しくて仕方がない。彼女もそのようだ。

だから生まれ変わってからも、わざわざ僕を探し出してやって来た。そしてずいぶん年下の妻として、今日も僕と口喧嘩している。

『好み』

財布を落としたので拾おうとしたら、横に何か封筒が落ちていたので、これもポケットから落としたのかと思って、ぼくは財布と一緒に拾い上げた。

すると目の前にふっくらした……丸々とした、えくぼの可愛らしい、お姉さんが立っていた。

「僕、幾つ？」

「十三歳」

「ああ、それはダメ、犯罪だわ」

お姉さんはがっくりとうなだれた。長い黒髪が地面に広がる。

「あのね、これは紅包といって、結婚せずに亡くなった女性を、死後に結婚させるための儀式なの。これを拾った人はその人のお婿さんになるのよ」

「お姉さんは何歳なの？」

お姉さんはますますしよんぼりした。蚊の鳴くような声で

「……二十九歳」と返事した。

「ちよつと離れてるね」

「紅包を置きなさい。やり直し！ やり直したらいいわ！」

「やり直してあり？」

「……わからないけど。でも十三歳の男の子の家に乗り込むほど恥知らずじゃないわ。いくら美少年が好きでも！」

「お姉さん、腐女子だったの？」

「……なんでそんな言葉知ってるのよ」

「ぼくのお母さんもそうだよ。コスプレもするよ」

お姉さんの目が輝いた。

「えっ、お母さん何歳なの？」

「三十三歳」

「マジ尊敬」

「確か龍・劔推し」

「あたしもおお！」

「お姉さん、うちおいだよ」

「いいの？」

「お母さんも仲間ができたらすごく嬉しいと思うよ」

そう言って、ぼくは紅包を大切に懐に入れた。
亡くなった母の写真と一緒に。

我が家では幽霊達のコスプレが毎日賑やかに行われている。